

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13038

研究課題名（和文）『枕草子』の本文研究

研究課題名（英文）Textual Research on the Pillow Book

研究代表者

閻 紹ショウ（Yan, Shaojie）

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：10889984

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：『枕草子』は平安中期に成立し、現存する諸伝本は早くても鎌倉中期ぐらいのものであるが、本研究計画は『枕草子』が平安後期の諸作品に与えた影響を確認することによって、平安期における『枕草子』伝来の事情をより明確した。また、従来あまり重要視されなかった前田家本『枕草子』を視野に入れ、平安後期の『枕草子』の本文の様相を検討することによって『枕草子』の原本の様相を垣間見ることができた。さらに、平安後期の諸作品が『枕草子』の情趣的な面を継承しながらも斬新な表現世界を創出したことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究計画は平安後期の文学作品を仲介として、類纂本系統の前田家本の本文調査に重点を置き、前田家本が『枕草子』諸本においてどのように位置づけられるのかを考証したものである。また、平安後期の『枕草子』の本文を整理し、『枕草子』が平安後期の諸作品に与えた影響を確認することによって、『枕草子』の文学史的な位置付けと再評価を行うことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The PILLOW Book was written in the Middle Heian Period, and the existing texts are only from the Middle Period of Kamakura at the earliest. This research focus on the textual investigation of the Pillow book. We restored a part of the Pillow Book's Original appearance by confirming the influence of the Pillow book on the literary works in the later Heian Period.

By studying the appearance of the text of the Pillow Book in the late period of Heian, the Maedake's Pillow Book, which was not paid attention to before also entered our vision. Moreover, we saw Heian's later literary works created a new world of expression while inheriting the Pillow Book.

研究分野：国文学

キーワード：枕草子

## 1. 研究開始当初の背景

平安中期の重要作品として知られる『枕草子』は、平安後期文学作品へ与えた影響が『源氏物語』とは比較ならないほど少ないと認識されているが、その裏には池田亀鑑による本文研究がある。池田の研究は、現存する『枕草子』の諸伝本を類聚形態の前田家本と堺本、雑纂形態の三巻本(安貞本)と伝能因本に分類し、その中、三巻本系統、殊にその第一類本と言われる本文が最も優れていることを説いた。それゆえ、『枕草子』から後世作品への影響の検討は、基本的には三巻本『枕草子』によって行われてきた。

しかし、能因本『枕草子』の奥書に「枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世にありがたき物なり」と記されるように、『枕草子』はその本文を一本化できない作品である。諸本には後人の異本校合による修正や私意による増補などがあることから、原本の面貌を判断しがたい。また、『枕草子』の平安後期の作品への影響関係は、言葉遣いの類似点や、一読して『枕草子』の引用であるかわからないほど薄い引用趣向についての指摘が多く、一見『枕草子』の影響と思われるが、実は『古今和歌集』からの影響を受けた用例などがある。『枕草子』の受容については、根本からの見直しが必要と考えられる。

## 2. 研究の目的

『枕草子』の平安後期の作品への影響関係は、言葉遣いの類似点や、一読して『枕草子』の引用であるかわからないほど薄い引用趣向についての指摘が多く、一見『枕草子』の影響と思われるが、実は『古今和歌集』からの影響を受けた用例などがある。『枕草子』の受容については、根本からの見直しが必要と考えられる。

また、本研究計画は平安後期の文学作品を仲介として、類纂本系統の前田家本の本文調査に重点を置き、前田家本が『枕草子』諸本においてどのように位置づけられるのかを考証したものである。また、平安後期の『枕草子』の本文を整理し、『枕草子』が平安後期の諸作品に与えた影響を確認することによって、『枕草子』の文学史的な位置付けと再評価を行うことが期待できる。

## 3. 研究の方法

### Step1. 『枕草子』が平安後期文学へ与えた影響の用例の収集

平安後期物語が『枕草子』の影響を受けた用例の先行研究をまとめ、諸作品の注釈書を活用し、また新用例の発見も期待する。また、諸作品の伝本性質に応じて、本文の改変を特に注意を払い、諸伝本によって『枕草子』の受容態度の異同があるかを確認し、異同がある例に対してその変遷を解明する。

### Step2. 平安後期流布した『枕草子』の伝本の様相を検討

平安後期文学作品へ影響を与えた『枕草子』の該当章段を抽出して、関係する『枕草子』の章段の諸伝本(三巻本、伝能因本、堺本の第I、第II類本、前田家本)を対比、影響関係を確認し、その本文改変の過程を明らかにすることを寄与する。特に、『枕草子』の該当する伝本しか存在しない章段を重点に置く。そのうち、前田家本と宸翰本を重点的に対比、整理する。

また、『枕草子』の影響と思われる用例が実は他作品からの影響を受けた用例があるため、Step1で収集した用例と『枕草子』以外の作品例えば『古今和歌集』などとの影響関係を調査し、必ずしも『枕草子』から影響を受けたとは言えない用例とを区別する。

以上により、『枕草子』が平安後期の諸作品に与えた影響の実態を明らかにし、『枕草子』の文学史的な位置付けを再評価することができる。

#### 4．研究成果

『枕草子』は平安中期に成立し、現存する諸伝本は早くても鎌倉中期ぐらいのものであるが、本研究計画は『枕草子』が平安後期の諸作品に与えた影響を確認することによって、平安期における『枕草子』伝来の事情をより明確した。

また、従来あまり重要視されなかった前田家本『枕草子』を視野に入れ、平安後期の『枕草子』の本文の様相を検討することによって『枕草子』の原本の様相を垣間見ることができた。

さらに、平安後期の諸作品が『枕草子』の情趣的な面を継承しながらも斬新な表現世界を創出したことが明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------